

京都で見た羽黒トンボ ～生き物の道が教えてくれる都市の可能性～

子どもの頃、夏の里山で遊んだことがある人なら、きっとこのような光景を思い出すことだろう。それは、真夏の日差しを浴びながら、夢中になって蝉や蝶を追っている内に、汗の流れる頬にふと微かな涼風を感じ、その涼風に誘われて行った先で出会った光景だ。

そこには、木洩れ陽の中をひらひらと優雅に舞う黒いトンボの姿があった。そのトンボの名は、羽黒トンボ。黒い羽根に、金緑色に光る細い胴体が、実にエレガントな姿をしたトンボだ。羽黒トンボが舞うこのような光景を、かつては日本の多くの地域で目にすることができた。羽黒トンボは、里山の涼しさの象徴と言ってもいい。羽黒トンボの姿は、手入れがされた雑木林や森の中の風通しの良い径、木陰を流れる小川、大木に囲まれた小さな祠などで見ることができた。しかし、最近はこの黒いトンボが見られる里山もだいぶ減ってきた。

ところが、五年ほど前に、わたしは全く意外な所で、羽黒トンボが舞う光景を目にした。ビルが林立する都会の中で、ひらひらと飛ぶ羽黒トンボを見つけたのだ。わたしは一瞬何かの見間違いではないかと我が目を疑ったが、それは間違いなく羽黒トンボだった。真夏の京都の中心部での出来事だ。

京都の夏の暑さは油照りと呼ばれるほど厳しい。しかも、ひらひらと黒いトンボが飛んでいる周囲は正真正銘のコンクリートジャングル、とても里山などと言えるような場所ではない、そこはまさにヒートアイランドである。140万人の大都市の中心部で、里山の涼の象徴のような羽黒トンボが飛んでいるなんて、どう見ても場違いだと思った。

でも次の瞬間、私の脳裏には生き物の道というイメージが浮かんで来た。京都は周囲を山に囲まれた盆地で、周囲の山々に源を発した幾筋かの川が市内を流れている。それらの川の上流には羽黒トンボの生息に適した清流や大きな森が残されている。自然豊かな上流からヒートアイランドと化した都心部に向けて、今も生き物たちが供給され続けているのではないか。山から都市につながる生き物の道は、今も生きているのではないかと直感した。

しかし、山から都市部にまで涼風に乗って川を下って来たトンボ達はどうなるのだろうか。少し心配になった。羽黒トンボは幼虫時代（ヤゴ）を川で過ごし、成虫（トンボ）になると林などの涼しい木陰に移動して小さな虫などを食べて過ごす。成熟すると川に戻り流れの中の水草に卵を産む。私の経験では、このトンボは500メートルくらいは移動するようだ。私の自宅から約500メートル離れた所に霞ヶ浦に流れる小野川がある。この川に羽黒トンボが生息していて、毎年夏になると自宅の庭のモミジの木陰でこのトンボを見ることができたからだ。しかし、モミジが枯れて、大きな木陰が庭から無くなってから、羽黒トンボも見ることができなくなった。

京都の都心部を流れる鴨川(賀茂川)を夏に歩いていると、実際に羽黒トンボをよく見ることができる。確かに、夏の鴨川には、いつも涼しい川風が吹いている。その涼風を求めて、多くの人が川端にやって来て佇んでいる様子も見られる。このようにして、上流の大きな森で冷やされた空気は涼風となって川を通して京都の街に流れ込んでいるのだ。この川風は、街中にも幾筋もの流れになって広がって行くに違いない。鴨川や桂川は、真夏の京都の街を冷やす冷却装置でもある。

鴨川から約400メートル離れて京都市中心部最大の緑地である御所がある。そして、御所から数百メートル間隔でほぼ市内全域に神社や寺が配置されている。今ではこれらはコンクリートの都市に浮かぶ緑の島に見えるが、かつての古都京都には緑の島々の間に木々の木陰や池、民家の坪庭などが数多くあったはずだ。そして、都市に浮かぶ緑の島々は、何百年以上もその位置を変えていない。空間の歴史遺産とも云えよう。

鴨川沿いには御所以外にも多くの神社や寺がある。これらを、川から街中への生き物の導入口と見ることで、これらから数百メートル以内に分布する幾つもの寺社を緑の飛び石として、つまり、生き物が街の中に広がっていくための飛び石と見立てることができる。このようなイメージを持って、京都の地図を広げて見れば、あなたにも京都をかつて被っていた羽黒トンボの道が、つまり、涼の道が想像できるのではないか。

京都は千年の都といわれる。様々な記憶が蓄積した都市である。ここで何十年前何百年前の羽黒トンボの道(涼の道)を発掘することは不可能ではないと思う。少なくとも、人々の記憶には、何十年前の神社や寺の庭園で、あるいは自宅の坪庭で、京料理が並んだ川床で、打ち水をした路地裏で、ひらひらと優雅に飛ぶ黒いトンボの姿が、涼の感覚と共に刻まれているはずである。

それらは、もちろん歴史書に載るような記憶ではない、しかし、日常のありふれた光景だからこそ、それらの記憶には大きな価値があるのだ。その土地の潜在的な可能性は、ありふれた日常の光景の中にこそ宿るものだ。その可能性は、今もその土地の中に潜在している。だから、わたしたちは歴史家ではなく、地図作成者になることで、都市の記憶の中から潜在的な可能性を掘り起こすことができる。つまり、歴史を空間化して眺めるのだ。

羽黒トンボなどの生き物たちと相談しながら進める未来の都市づくりを考えてみてはどうか。京都を囲む緑の山々と都心部を結ぶ生き物の道の幹線(鴨川など)から川沿いの玄関口(御所など)へ、そこから市内に配置された緑の島々(神社や寺)へと続く飛び石(坪庭や木立、藤棚など小緑地)が街中をネットワーク状に覆う未来の京都を想像してみよう。都市空間を読み直し読み替え、都市に潜在する繋がりを浮上させていくことで、かつて京都を被っていたであろう羽黒トンボの道(涼の道)を取り戻していくことは、決して不可能ではないと思う。

涼を探し求めて飛ぶ羽黒トンボと対話しながら、都市に緑の飛び石をつくる。それは、ヒートアイランドに涼のネットワークという新しい都市の文脈を広げて行くことでもある。これからの都市のあり方を評価するのに、生き物たちの意見を無視することはできない。しかも、それが昔からいた生き物なら当然だ。

都市の緑化率や二酸化炭素排出量の削減率などといった数値目標をただ提示しても、人々が主体的に行動するために必要な動機付けとしては不十分だ。それらには、生活実感が伴わないからだ。羽黒トンボの道は、都市の緑化といった緑を量で評価する考え方に対する緑の文脈化という考え方の提示であり、個別に実施されてきた地球温暖化対策に対して、都市全体に涼のネットワークを広げるといった生活文脈に沿った地球温暖化対策の提示でもある。そのような文脈化やネットワーク展開を、羽黒トンボのような生き物達と人々が対話しながら都市全体で進めていくのだ。

人々はトンボや蝶になって都市を動くことで、都市を自由に読み替えることができるようになり、都市に潜在する様々な繋がりや可能性を浮上させることができるのだ。

う。それは、地球温暖化対策や生物多様性保全と地域活性化の両方を同時に実現するという発想を、人々にもたらずに違いない。

いつの日か人々が京都を訪れ、歴史が刻まれた庭園の中にひっそりと帰って来た羽黒トンボが舞う姿を目にするとき、都市に広がりはじめた生き物の道と涼のネットワークを、そして、大いなる自然とのつながりを取り戻そうとする未来都市の姿を見るに違いない。

私は京都を訪れるたびに、そんな光景を想像し、木洩れ日が揺れる苔むした庭園に佇みながら、歴史を眺めている。

2005年7月1日